吉益東洞　医案①

京師河原街売人、升屋伝兵衛女。衆医皆以て労瘵となす。而して方を処して亦皆効なし。羸瘦日に甚だし。旦夕まさに死なんとす。売人素より古方を懼れる。然れども已ゆるを得ざるを以て来たりて診治を求む。先生既に往きてこれを診るに、其の意の信ぜざるを知りて、即ち謝して帰る。

月踰え其の女死す。其の後二年、其の妹亦病む。売人謁えて曰く、「撲初めに五子有り、其の四人は皆已に亡し。其の病皆労瘵なり。蓋し齢十七に及べば、其の春正月、瘵必ず発して秋八月に至りて、必ず皆死す。嚮先生の診するところ此れ其の一つ也。亦死するのみ。而して今季子年十七、亦これを病む。夫れ撲もとより古方に奇効有るを知らずに非ず。其の多く峻薬を用うることを擢る。然るに顧みるに緩補之剤にてこれを救うに、一も其の効有るを見ず。願わくば先生これを瘳せよ。縦え死すとも複た悔いるところなし」と。先生為にこれを診す。気力沈溺、四支憊惰、寒熱往来、咳嗽殊に甚だし。小青龍湯及び滾痰丸を作りて雑進す。其歳いまだ八月に至らざるに、全常に復す。